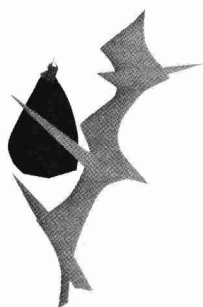


冬のかたみに・夢は枯野を



立原正秋

冬のかたみに・夢は枯野を



立原正秋

新潮社版

立原正秋選集 11

冬のかたみに・夢は枯野を

一九七五年九月三〇日発行
一九八一年七月三〇日六刷

著者 立原正秋

装幀者 舩田圭子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒100 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一二二
編集部(03)二六六―五四二一

振替東京四一八〇八

二光印刷 新宿加藤製本

定価 一一〇〇円



〈第十二回(最終回)配本〉

© 1975. Masaki Tachihara. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

立原正秋選集 11 目次

埋葬 5

やぶつばき 28

猷修館往還 39

夢は枯野を 86

冬のかたみに 202

立原正秋選集

11

埋 葬

最初に肉親の埋葬にたちあつたのは六つのとしの冬で、母方の祖父の曾宮信時が没したときだった。彼は禪寺の墓所に埋葬された。一月なかばのよく晴れわたった日の午後、私は火葬場で祖父の骨をひろいながら、死者がかくも清潔な一片の骨になるものか、と感じたのを、いまでも記憶にとどめている。清潔で簡素な葬儀だった。後年、父から聞いた話では、母方の祖父は、死を単なる自然現象として受容していた、ということであった。父方の祖父はすでに故人になっていたが、父は母方の祖父を尊敬していたらしくかった。父の兄、つまり伯父が亡くなったのは、私が八歳の春で、このときの葬儀は、花ざかりの季節だったのに、なか暗い容で私の裡に残っている。それは伯父が病身だったせいかも知れなかった。また、土葬という風習も私には暗く映った。伯母のひさは箕輪家からきたひとで、西室家に興入れしてきて間もなく伯父が病氣になり、いらい、二人の子をうみ育てながら病身の夫によく仕えてきた女だった。

伯父が亡くなったとき彼女は三十一歳だった。このとし、箕輪家から成瀬家に興入れして三人の子をうんだひさの姉のよねが、やはり病没した。そして一年後の秋、ひさは、成瀬家の希望で、成瀬和之のもとに後ぞえとして再婚していった。残された従兄の十一郎が十一歳、その妹の恭子が九つで、ひさが成瀬家に再婚して去るについては、ひとつの約束事が出来ていた。それは、ひさが亡くなったときは、なきがらは成瀬家の墓所には納めず、西室家の墓所に埋葬する、という約束だった。約束を交したのは私の祖母と成瀬和之で、立ちあつたのは私の父と、ひさの父の箕輪利正だった。このような約束が何故とり交されたのか、私は後になってその事情を知った。伯父の泰男は、遺言として、ひさが再婚してこの家から出るのはよいが、死んだときは西室家の墓所に埋葬されること、この条件が守られるのなら再婚はかまわない、と書きのこしていたのである。これは遺言のかたちをとってはいたが、伯父と伯母のあいだで交された約束らしかった。したがって伯母の再婚生活は現世における仮の生活だったともいえた。この約束事には、人間の死と埋葬をなおざりにはできない人達の考えが出ており、私は、母方の祖父が、人間の死を単なる自然現象として受けとめていた事と思ひあわせ、たいそう興味をおぼえた。ひさは成瀬家に再婚して二子をもうけた。ひさは、成瀬家でうんだ上の子の捷平が十四歳になった冬、四十七

歳で病没した。約束によりひさのなきがらは西室家の墓所に埋葬されることになったが、成瀬家に柩を迎えに行ったのは十一郎と恭子で、私は父の代理として二人に従って行った。従兄は二十六歳、すでに妻子があり、従姉は私と同じ二十四歳になっていた。約束事とはいえ、すでに他家の人となった母のなきがらを自分の家に引きとることに、恭子は兄とのあいだに違和感を抱いているらしかった。従兄は、生前の両親に約束事がなかったとしても今日の事は当然である、と言っていた。時間をへだてながらしかも二つのものが相離れない不離の問題について、従兄は疑いを抱いていなかった。成瀬家で葬儀が終わったのは昼すぎで、やがて柩はこちらから出向いた霊柩車に移され、霊柩車には従兄が同乗し、私は従姉が運転してきた車に乗った。私達は、成瀬家の会葬者が見送るなかを出発した。私達の町まで車で一時間半の距離だった。雑木林の緩やかな坂道をおりて行く途中の右側に、成瀬家の墓所があり、従姉は車をとめると、あそこよ、とハンドルから手をはなして雑木林をさした。葉の落ちつくした雑木林の奥に、かすかに墓石群が見えた。硬く澄んだ一月の空の下で、雑木林と墓石群が清潔だった。あそこに入るべき人だった、と恭ちゃんは言っているのだね、と私はきいた。そうじゃないのよ、わたしはなにもそんなことを言っているのではないのよ、死んだ以上はどこに埋葬されたってかまわないけど、いった

んよそこに去った女を、なにもわざわざ自分の墓所に連れ戻すことはないでしょう、と従姉は言った。幼いときに母に去られた憶みを言っているのだろうか、と私はふっと思った。雑木林の奥の方に、葉の散り果てた樺の大木が二本天空をさしており、私にはそれがどういいうわけか二本の巨大な卒塔婆に見えた。ここも自家墓地だが、やはり土葬だろうか、と私は従姉にきいた。土葬よ、わたしは死んだら火葬にしようわ、お寺の墓地の方がいいわ、死んでしまつてまでも血のつながりのある人達と同居することはないわ。従姉は顔を前方に戻すとアクセルを踏んだ。柩を積んだ霊柩車はもうかなり前方を走っていた。坂道をおりきつてしばらく走り、私は車窓越しにうしろを振りかえつてみた。樺の大木がやはり巨大な卒塔婆に見えた。正常者の正常な状態で見えるのだから、錯覚ではなかった。といつても、卒塔婆に見えたことは慥かだったから、心理的錯覚が介在していたのかも知れなかった。そこで私は自分を振りかえつてみた。記銘の時間や事柄を誤って記憶したことがあるだろうか……。ふりかえつてみても、中樞に複雑な過程の痕跡は見あたらなかった。おかしいこともあるものだが、と私は呟いた。なにが？ と従姉がきいた。私は樺が卒塔婆に見えたことを話した。屋間から夢をみたのかしら、と従姉は言った。いや、夢じゃないよ。夢でないとするらと幻覚かしら。幻覚ではない、きわめて正常なんだ。私は答え

てから軽い眩暈をおぼえた。このとき私は従兄の言葉をおもいかえしていた。生前の両親に約束事がなかったとしても今日の事は当然である、と言った従兄に私は不思議な感情を抱いていたのである。樗の巨木が巨大な卒塔婆に見えたのは、この感情となにかかわりがあるのかも知れなかった。やがて町をぬけて国道にさしかかったとき私達の車は霊柩車に追いついた。あの霊柩車はたしか外国から輸入した車よ、クライスラーだったと思うわ、と従姉が言った。格式を重んじる町だからな、と私は答えながら霊柩車を見た。国道を走っているのは乗用車とトラックが殆どだった。晴れた日に霊柩車が走っているのが、なにか場ちがいな感じがした。考えてみるとおかしいのよ、あそこに入っている人がどうしてわたしの母だとわかるの、と従姉が言った。どうしてわかるって？ 恭ちゃんは顔をおぼえていないのかい。それは憶えているわ、成瀬の家に遊びに行ったこともあるもの、わたしが言っているのは、そういうことではないのよ、あのひとわたしをつないでいるものがないのに、どうしてあの人がわたしの母だと言えるの、と言っているのよ。血が繋がっているじゃないか。血がつながっているって……そんなのおかしいわ、そんなこと問題じゃないわ、と従姉は声をあげて笑った。私は従姉の横顔を見た。亡くなった伯母との共通点を横顔にさがしたが、私の記憶にある顔はすでに歳月を経て鮮明ではなかった。伯母が成瀬家

に去っていろいろ私は彼女にはあつていなかった。血のつながりなどを言うのはおかしい、と言って笑った従姉の横顔がいくらか頼れた感じがしたのが私には意外だった。やがて霊柩車は町に入り、家についた。そして親族の者が出迎えるなかを、柩は通夜をする部屋に運びこまれた。すでに葬儀屋が来ており、祭壇をこしらえているところだった。

2

いったん他家に去った女を死者として再び西室家に迎え入れたので、ごく内輪の通夜にしたのに、それでも出かけてくれた人が多く、それらの最後の人達が辞去したのは夜半だった。通夜の部屋には私の父母と十一郎、それに箕輪家の人が三人のこり、まだ酒をのんでいた。箕輪家の三人はいずれも故人の兄弟で、彼等は前夜の成瀬家の通夜にも出ていたはずだった。私は、母が空の銚子を盆にのせて台所に立ったときに、いっしょに部屋を出て台所に入ってみた。従姉は手伝いの女達と後かたづけをしていた。ウイスキーかブランデーはないのか、と私は従姉にきいた。ウイスキーなら食堂にあるわ、わたしの部屋にブランデーがあるけど、と従姉はちよっと私の方をふりかえって答えた。じゃあ、恭ちゃんの部屋に行っているよ、と私は従姉の耳もとでささやくと、台所を出て二階の彼女の部屋にあがっ

た。従姉は二階の三部屋をひとりですべて使っており、私は勝手知った書斎に入ってブランデーをさがした。ブランデーは書斎にはなく、寝室のベッドのわきのサイドテーブルの上にあった。テーブルの上には、ロンドンのフェバー書店発行のエリオットのエッセイ集がおりてあり、赤鉛筆がはさんであった。私は鉛筆がはさんである個所を開いてみた。ウィリアム・ブレイクを論じているページで、ページの余白に、あの人がどうしてわたしの母だとわかるのか？と書いてあった。ブレイク論は六ページの短いエッセイで、私はざっと読んでみたが、あの人がどうしてわたしの母だとわかるのか？とはかかわりがなかった。私は塙とグラスを持って寝室のとなりの居間に行き、ソファに掛けてブランデーをグラスに注いだ。変に金属的な疲れが汗のよう^{かた}に軀にたまっていた。あの人がどうしてわたしの母だとわかるのか？妙な言葉だ、恭ちゃんはほんとうにそう思っているのだろうか……。従姉はこの町の私立女子短大で英語を教えていたが学者ではなかった。エリオットの詩のような小説を書いてみたい、と言っていたが、まだ一篇も小説は書かれていなかった。私はソファに寝ころんだ。従姉は小説を書くにしては身辺が華やかすぎた。学生時代、年上の男に執着したことがあったが、結局それはいつときの遊びにとどまり、こんどは十六歳の少年をつかまえ、年上の男から教わったかたちをその少年に教えていた。面白い

のよ、とその時分彼女は言っていた。まるで自分の軀に刻印をきざむような容赦のなさが従姉にはあった。相手の男が従姉の軀に刻印をきざむのではなく、彼女が自分自身で刻んでいたのである。大丈夫かい、そんなことをして、と当時私は従姉に言ったことがあった。あら、あの男達、誰もわたしのなかに痕をきざめていないのよ、と従姉は弾けるような笑い声をたてた。あの人がどうしてわたしの母だとわかるの……いったい従姉はなにを考えているのだろうか……。血統だろうか、と私は考えてみた。柩を運んでこの町に帰ってくるとき、車のなかで従姉が見せた顔^{ひま}れた横顔を、私は死んだ伯父の顔に重ねあわせてみた。病身で子を二人もうませた男の精力はなにか尋常ではなかった。だが伯母はどうだったろう。病身の夫につかえて子を二人うみ、夫の死後、他家に再婚して去り、そこで子を二人うみ、死者となって再び前夫の家に還ってきた。ここにもなにか淫らなにおいがした。従姉がときどき見せるあの弾けるような笑い、もしかしたら、この両親の淫らさに起因した情緒的反応だろうか。もしそうだとしたら、あの人がどうしてわたしの母だとわかるの、と言ったのは、自分の血の淫らさを認めた反語かも知れない。従姉があがってきたのは一時すぎだった。わたしのむわ、と彼女は寝室からグラスを持ってきて、椅子にかけながらグラスをテーブルにおき、それから暖房^{だんぱう}のスイッチを強い方にきりかえた。私は

従姉のグラスにブランデーを注いだ。彼女はだらしなく、両脚を前にのばしてブランデーをのんだ。うちのおふくろはどうしている？ と私はきいた。箕輪の叔母さんたちと十畳の間で眠っているわ、男達はまだ酒をのんでいるのよ、マデイラがあるけど、おのみになる？ いや、このブランデーでいいよ、行田さんとはどうなっているんだね？ ああ、あの人、そうね、結婚するかも知れないわ。恭ちゃんが行田さんと結婚することなの？ そうらしいわ。それから二人はしばらく黙ってブランデーをのんだ。わたしにはああした男が相応しいのよ、と従姉はチョコレートを一つくちに投げこみ、それからブランデーを含んでから言った。行田さんのことかい？ そう、知識人同士がいっしょになったら、うまくやって行けないわ。誰のことだい？ すると従姉はちよつと目をあげて私を直視し、それから蔑をつけた。婉ぎたての果実のような感じが従姉の顔に残っていたのは、彼女が二十歳頃までだった。従姉が男と遊んでいた頃、私は外からそこを垣間みただけで、私には未知の場所だった。自分の軀に刻印をささむような容赦のなさがあったにしても、あそこは案外脆い世界だったのではないか、と私は考えたことがあった。行田といっしょになると言っている従姉は、あの世界から病み抜けてきたということなのか……。着がえてくるわ、と従姉はグラスをおくと起ちあがり寝室に入って行った。衣ずれの音がし、

しばらくして従姉は黒いガウンを着て現れた。いつものようにガウンの下には一条もまどっていないのだろう、と私はガウンの下に従姉の肌を感じた。私の目には無慙な肌だった。男達のあいだを自在に通りぬけてきた、と本人は考えているのだろうが、私にはその肌は無慙だった。従姉はブランデーをつぎたすと、あの人、うちの父といっしょになる以前に、成瀬とかんけいがあったのよ、とどるそうに言った。どこからそんなことをききだしてきたんだい、と私は訊いた。もちろん私には初耳だった。話の出処なんかどうだっていいじゃないの、成瀬は、むかし、箕輪家の姉妹のどっちをもらってもよいと思っていたらしいわ、ところが、妹の方とさきに出来ちまったのね、そこで、二人は、いっしょになろうと約束したらしいわ、そこへ、箕輪の家から、順序として姉の方をさきにかたづけたいから、もし貰ってくれるなら、よねをもらってくれ、と言ってきたわけ。ひささん、つまり恭ちゃんのお母さんは、そのとき承知したのかね。承知するもしないも二人は野合だったし親の命令をきくより仕方なかったんでしよう、それから間もなくあの人はお見合いをして西室家にきたというわけよ。すると、成瀬さんにしてみれば、むかしの恋人と再婚したということになるな。そうなるわね、でも、成瀬は、けっきよく箕輪の姉妹を自分の妻にしたということよ、わたしの淫らな血は、これは箕輪の血から受けたものかも

しれないわ、ね、太郎ちゃん、成瀬の家の捷平をどう思う？ どう思うって、あの子は恭ちゃんの弟じゃないか。あの子を誘惑してみようかしら、と昨日から考えているのよ。従姉の目がにわかに光を帯びてきた感じがした。彼女はブランドをひとくちふくむと、むかし十六歳の少年を誘惑したとき、その少年の包茎を剥くった話をした。あの捷平という子はいくつだ？ 十四歳よ。十四歳か……。私は、少年を誘うのは自分の趣味のためか、と従姉にきいた。それもあるけど……。まあ、そう解釈してもらえればいいわ。ガウンの胸もとがすこしはだけており、そこから右の乳房の隆起の根元の方がのぞいていた。私はやはり従姉の肌に無慙な色を覗いていた。しかし従姉は表面から見るとかきりではいちども状態が乱れたことがなかった。

3

告別式を終えたとき、れいのクライスラーの霊柩車^{れいごしや}がすでに門前に来て待っていた。菩提寺^{ぼだいじ}は浄土宗の永源寺で、町の西はずれにあった。やがて霊柩車が出発した。私は父母といっしょに四番目の車で出発した。恭ちゃんの喪服は似合うわね、と母が父に言っていた。私は前夜の従姉の肌をおもいかえしていた。あの無慙な肌は、ある意味では明証^{めいしやう}そのものだった。彼女は少年の包茎を剥くのと同じ精神

で自分の軀^{からだ}を剥いていた。やがて永源寺の山門の前につき、霊柩車から柩がおろされた。施主の十一郎が位牌を持ち、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽と書いた招きの旗四本は故人のきょうだいが掲げ、竹の上部に大根の輪切をさし、そこに蠟燭^{ろうそく}をさした六道の辻は、今日の告別式にきた成瀬捷平が持った。私のかたわらを歩いている従姉が、なんであんな旗とか六道なんてアナクロなものを掲げるのかしら、と眩くように言った。仏が迷わずに極楽に辿りつけるようにと、つまり案内役だよ、あれはね、と私が答えると、従姉はもう別のところに視線を移していた。捷平を今夜家に泊めようかしら、と言ったのである。私は、前夜従姉の軀にのめりこんで行った自分を振りかえり、俺とのあいだにまだ余地が残されているとは思わないか、と訊いた。太郎ちゃんとは駄目よ、それに、あなたは、わたしを知りすぎているから駄目よ、やはり行田のような男がわたしには相応しいのよ。行田さんだってインテリじゃないか。あんなインテリ……。私立学校の理事長の息子として遊んでいても暮せる男でしょう、幼稚園から短大まで、あそこからあがってくるお金はたいへんな額よ、わたしはせいぜいそのお金を使うことにきめたの。やがて墓地につき、柩がおろされた。すでに二人の入夫によって墓は掘られてあり、深さが二メートルはあった。この町の死者の埋葬は、伝染病で死亡した者以外はその殆どが土葬だった。郊外の

百姓は自家の畑のすみになきがらを埋葬して墓を建てた。あるいは雑木林の入口になきがらを埋めた。寺に墓地を持つてゐる家は限られていた。埋葬する畑や山を持つてゐない職人などの家では、自家の庭すみに死者を埋めた。埋葬して数年は、死臭が庭に充ち、殊に梅雨期などはひどかった。生者は、こんな埋葬を誰しも異としなかった。過去何代もこのような埋葬に慣れてしまひ、このかたちを異と思わなくなつたのか、それとも生者と死者を繋ぐ手段としてこのかたちが保たれてゐるのか、と私は考えたことがあつた。なぜ寺の墓地に埋めないのだ、と私は友人に訊いたことがあつた。この友人の家は郊外で百姓をやつており、山や畑を持つてゐるのに、死者を庭に埋めていた。寺の墓地では遠い、とそのとき友人は答えてくれた。位牌だけは寺に納めておくのだとも言つていた。このように死者をいつまでも生者のまわりにとどめておくのは、そこになんとはなしに近親相姦のおいがした。従姉がそばによつてきて、土葬つてほんとにいやだわ、と言つた。人夫の手で柩が墓穴におろされ、近親者から土をかけた。やがてすっかり土をかけ終り、土饅頭がつくられた。それから、やはり人夫の手で、伏つた細い青竹で娑婆垣がつくられ、招きの旗と六道が土饅頭の上にたてられた。娑婆垣は百カ日に取りのぞくならわした。西室家の墓所は永源寺のなかでもかなり広い場所を占めており、分家した私の父もやがてはここ

に埋葬されるはずだった。父も母も火葬を望んでいたが、いま私の前にひろがつてゐる墓石群は、すべて土葬の上に建てられた墓石だった。ざっと目で数えただけで墓石は三十はあり、たとえば先祖代々の墓としてひとつの墓石の下に幾人もの骨が埋められてゐるのは対照的に、この土葬の墓石群は生者との近さを思わせた。私は従姉に、土葬をいやがつてゐる理由をきいてみた。ああやつて土の中で腐らせるよりは、火葬にして清潔な骨を埋めた方がいいんじゃないの、町はずれの卵塔場の方がこの墓地よりほど清潔だわ、と従姉は答えた。そして、太郎ちゃん、あなたはどうかなの？ と私を見てきいた。俺は自分のことはまだ考えたことがないよ、しかし土葬より火葬の方が望ましいことだけはたしかだ、行田さんの家ではどうなんだ。あそこも土葬よ、裏山に墓地があり、冬など、葉の散り果てた林の上から、死者が生者を見おろしてゐるのよ。それじゃ恭ちゃんも土葬になるよりほかないね。わたしはいやよ、遺言で火葬にしろからうから。いまからそんな先のことを考えなくともいいだらう、さあ、帰らう。私達は墓地を出た。本当に土葬つていやよ、と従姉は山門を出るときに言つた。いまから三代前まで遡ると、この町がまだ村であつた時分、ここに棲んでいた人々は、血縁者だけの集団をなしてゐた。したがつて禁忌とされてゐた近親相姦がごく普通におこなわれていた。歳月を経て血縁者がすべて他縁化

してしまったとはいえ、しかし近親相姦のにおいはいまだに残っていた。箕輪家と西室家と成瀬家は、三代前に遡ると、もともとも血の濃い血縁者同士であった。成瀬家は二代前にこの町を離れたのであった。土葬はこの血縁集団の余波かもしれなかった。町のはずれの山あいに卵塔場というのがあった。あだし野ともよばれており、いまの共同墓地で、現在そこに埋められる死者はいなかったが、昔は多くこの卵塔場が利用されていたらしかった。この町から車で北に三十分ほど入った村では、出棺のとき、壁をこわし窓を大きくひろげ、そこから柩を出しており、いまなおこの風習が残っていた。死者を門から送れば死者は再び門から戻ってくるので、窓から出し、その窓を閉じてしまえば、死者は再び家には戻ってこない、という考えからだった。このように死者を忌む村落があるのに、この町のように死者をいつまでも生者のまわりにとどめておくところもあった。自覚的に体験できない人間の死が、生者によってこのようにさまざまに埋葬されるのは、一種の秘儀だろうかと、私は考えたことがある。卵塔場は最初の頃は風葬の場所だった。生者は死者を戸板にのせて卵塔場に運んで捨ててきたらしかった。すると卵塔場にはあきらかに死者を忌む風習があった。死者を自家の庭に埋めだしたのは二百年ほど前からだと伝えられていたから、この町の葬儀の形式には数回の変遷があったわけだった。ああ、いやだ、土葬な

んで、と従姉はもういちど言った。会葬者はそれぞれ待っていた車に乗りこんでいた。町に出てコーヒーでもので行かない、と従姉が言った。こんな喪服姿でか、と私はきいた。かまわないじゃない、着ているものなどどうだっていいじゃないの、みんなをさきにやりましょうよ、わたし達は最後の車に乗り、途中で降りればいいんだから、と従姉は言うのと、まだ山門前に立っている会葬者を車に導いて行った。

4

葬儀のあくる日の午後、建築事務所に従姉から電話があった。話したいことがあるので今夜あいたい、と言ってきたのである。今夜はだめだ、と私は答えた。葬儀のために仕事は二日も滞ってしまい、やりかけの四十五坪の家の設計図を明後日までには仕あげねばならなかった。私はそのように話し、明後日ならあえる、と答えた。すると従姉は、設計図なんてどうだっていいじゃないの、いくら上手に設計しても、五十年も経てばそんな家なんか毀れてしまうんだから、と言った。そんなことを言っても駄目だよ、こっちは商売なんだから。しょうがないわねえ、じゃあ、明後日でもいいわ、夕方五時、サクラメントにいらして。五時は無理だ、六時なら行ける。じゃあ六時でもいいわ、きつと

約束を守つてよ。ここで電話がきれた。私はかきかけの設計図を前にして、いったい、なんの話だろう、と考えた。前日、埋葬の帰りに私達はサクラメントに寄つたばかりだった。従姉と私はコーヒ―をのみにサクラメントによつたが、コーヒ―店には入らずバーに入つてしまい、そこでマデイラを二本あけているうちに、私は喪服の従姉に心を惹かれ、やがてバーを出て二階にあがつたのであった。サクラメントは町の東はずれにある三階建の小さなビルで、一階は東側がコーヒ―店、南側がレストラン、西側がバー、そして北側は出入口で、二階と三階がホテルになっているのだつた。このホテルの社長は市会議長で、市議員達が重役として経営に参加していた。あまり大きい声では言えなかつたが、血縁者が他縁化してしまつたこの町を、再び血縁化するためにこの建物をこしらへたのではないかと、私は経営者達にいまも疑いの目を向けることがあつた。私と従姉はこの建物の二階で二時間ほどすごしたのであつた。血の近さに眩暈をおぼへたのは最初の頃で、いまではたがいの肉に執着をおぼへているだけだつた。しかし二人はやはり相手に自分を映して視ていた。私は、従姉から電話をもらつた日から休みなく働き、二日後の午後おそく、仕上げた設計図を建主のもとに届けて検討してもらい、その足でサクラメントに行った。従姉はバーでマデイラをのんでいたが、泥大島の袴を着ていた。いったん家に帰つたのか

い、と私はむかい側にすわりながら従姉を見た。いま頃の若い女で泥大島を着こなせる女はなかなかなかった。中年女でも、はやりの多色の大島を着ている当世、従姉の泥大島は私の心を打つてきた。私はいつもこんな従姉に安堵していた。充実した肉がこんな風に包まれていることが私には嬉しかった。あなたはブランドーにする？ いや、マデイラでいいよ、ところで、話したい事って、なんだい？ すると従姉はふくみ笑いながら糞をつけた。あの晩、捷平をわたしの部屋に泊めたのよ。なんだ、そんな話か。私は眩くとマデイラをのんだ。興味なさそうね、と従姉はこんどはだるそうな表情でマデイラをつぎたした。私は現場をみたわけではないのに、従姉が自分の弟を犯している情景が見えた。それは心に残る光景だつた。捷平がどんなめくるめく世界に落ちこんでしまつたかも知解る気がした。しかし私は無関心をよそおい、だまつてマデイラをのんだ。車を持つてきたけど、すこし遠出をしてみる元氣があるかしら、と従姉は灰皿に糞をもみ消しながら私を見た。行つてもよいが、どこへ？ 私は遠出にすこし氣持が動いた。鵜湖はどうかしら、と従姉は言った。遠すぎるじゃないか。私は冬の荒涼とした鵜湖の枯葦の風景に心が動いたが、やはりすこし遠すぎる気がした。片道二時間の距離だつた。泊ればいいじゃないの、どうせ明日は日曜だし。そうか、今日は土曜日だつたのか。私は休みなく働いた三日間を振

りかえり、では鵜湖に行くか、と呟いた。私は、従姉の前で自由になれない自分を感じた。無慙な肌^{むごん}が私を縛りつけていた。捷平をどういう風に^{いかに}して犯したか、鵜湖に行つてその事もききださねばならなかった。やがて私達はスクラメントを出て鵜湖に向つた。泥大島を着てきたのは、はじめから鵜湖に行くつもりだったのだらう、と私は思った。考えてみると、従姉はかつていちども弱者を愛したことがなかった。そのくせに本人はいつも傷だらけになつて歩いていた。まるで失行症の病人のようにあちこちにつかりこつちにつかりして歩いてゐた。表面は強がつていても、こつちから見てゐると危なっかしい足取りだった。そうして彼女の生き方が私には苦しく、また私に障礙^{しょうがい}になつてゐることは事実だったが、一方では、あんな女はやく行田のところ^{ところ}にいつてしまえばよい、といった思いもあった。従姉が誰^{たれ}といつしよにならうと赦^{あやま}せると思った。鵜湖畔^{うみほと}は冬場は一軒だけやつてゐるホテルがあるはずだった。私はそこに着いて捷平のことをきくのは従姉のためにも自分のためにもよくないと考え、車が山道にかかつたとき、埋葬の日の夜のことをきいた。つまり、若木を折るのと同じ事だったのよ。従姉の答は簡單明瞭に過ぎた。そんな風に簡單に言つてしまつてもいいものかね、と私はきいた。しかし従姉の内面が簡單でないことは私がいちばんよく知つてゐた。成瀬家に伯母^{おば}のなきがらを引きとりに行つた日の帰

り、どうしてあの人^{ひと}がわたしの母だとわかるの、と言つたのは、やはり瞭^{おぼろ}かな反語だった。捷平をあんな風に^{いかに}してしまつたのは、自分の血統^{けつとう}にたいする一種の認知障礙^{ちにかんしょうがい}だらう、と私は漠然^{もくぜん}と考へてゐた。けつきよくは恭ちゃんが無慙^{むごん}になるだけじゃないか、と私は言つた。もうやめてその話は、でも、太郎ちゃんがそんなわたしを理解してくれるのは嬉しいわ。従姉の声が穏やかすぎるのが私には不気味^{ふきみ}だった。私はそこに幽^{おそ}かな危険を感じた。山道の国道は葛折になつてゐたが、従姉は片手でハンドルを握つてゐた。太郎ちゃん、わたしの墓を設計しておいてくれないこと。墓？ 私^{わたし}は従姉の横顔をみた。あら、なにもびくりすることはないじゃないの、お墓^{おぼ}つて、みんなかたがきまつてゐるでしょう、だから、たとえげ自然石をひとつ据えつけるとか、そんな自然なお墓^{おぼ}があればいいと思つたのよ。そして従姉は声をたてて笑つた。この笑い顔は、伯母のなきがらを引きとりに行つた帰りにみたあの顔^{おもて}れた顔だ、と私はにわか^{にわか}に二本の巨大な卒塔婆^{そとば}をおもいかえし、墓の設計か、と呟いた。予想もしなかつた事だった。二本の大きな樺^{けやなぎ}の木が巨大な卒塔婆に見えたことは、私のなかでまだ解決されてはいなかった。葛折の夜の林道は車の往還もまばらで、車のエンジンの音だけがきこえた。車はいったん山頂に出て、そこからすこし西に降ると鵜湖^{うみ}だった。私達は湖畔^{ほと}におりと、左側に枯葦^{くし}のならんだ湖を見て湖の北岸のホテルに